

栽培のポイント



ホウレンソウの重要病害

萎凋病

病名 : ホウレンソウ萎凋病
 英名 : Fusarium wilt
 病原菌 : *Fusarium oxysporum f.sp.spinaciae*

原因と症状

- ①本葉 4～5 枚頃から発病が顕著になる。
- ②古い下葉から黄化症状を示し、次第に全体が萎れて生育不良となる。
- ③主根、側根の先端部や側根基部から茶褐色～黒褐色になり、導管は黒く変色する。
- ④病気が進行すると被害根には病菌の白い菌糸がみられて腐敗する。
- ⑤土壌中の病原菌は根の先端や側根基部より侵入して感染する。発病しやすい温度は 23～30℃、地温は 25～27℃で比較的高温である。地温が 33℃を越えると病原菌の活動は低下する。

対策

- 被害株残渣をすき込むと土壌中の病原菌密度が増加するので、すき込みをしない。
- 耐病性品種を使用する。
- 窒素過多で発病しやすいので、適正な肥培管理をする。特に冷涼地の雨よけハウス栽培は塩類集積と合わせて注意が必要。
- 登録のある土壌処理剤を登録基準に沿って正しく使用する。
- 極端な乾燥、多湿条件にならないように土作りをする。
- 完熟堆肥の利用。
- 複数の防除法を組み合わせ活用して、病気の出にくい環境作りをする。



地上部：黄化し、萎れる



地下部：褐色となる

べと病

病名 : ホウレンソウべと病
 英名 : Downy Mildew
 病原菌 : *Peronospora farinosa spinaciae*

原因と症状

- ①症状は葉に顕れる。葉の表面は淡黄色の不整形病斑を示し、裏には灰色のカビがピロード状に生じる。
- ②幼苗期の子葉が浸されるとやがて枯死して欠株となってしまう。
- ③病原菌はカビの一種で空気伝染する。早春～秋に発生が多く、低温・多湿条件で発病しやすくなる。
- ④平均気温が 8～18℃、特に 10℃前後で曇天や降雨が続くと多発する。
- ⑤原因としては、早蒔き、密植、換気不足、排水不良などのほか、窒素過多で株が軟弱徒長した場合にも罹病しやすくなる。

対策

- べと病菌は、病原性の異なる多くのレースが存在する。現在日本で発生しているレースにひとつでも多く対応できる抵抗性品種を利用する。日本ではレース 1～5 までの抵抗性品種では罹病する危険性があり、レース 1～7 まで抵抗性をもつ品種を使用する。
- 子葉展開時や本葉 2～3 枚期に予防として登録のある農薬を登録基準に沿って散布する。散布の際は葉の裏にも充分かかるように、薬液がしたたり落ちるくらいたっぷりと散布する。
- 発病後の防除は困難で、発病株は伝染源となるので見つけたら直ちに焼却する。
- 風通しや採光性をよくして多湿を避ける。



葉の表面の病斑



葉の裏面のカビ

炭そ病

病名 : ホウレンソウ炭そ病
 英名 : Anthracnose
 病原菌 : *Colletotrichum spinaciae*

原因と症状

- ①葉にはじめ水浸状の小さな斑点を生じ、やがて拡大してはっきりとした病斑となる。
- ②病斑は一般的に外葉に多くみられる。空気伝染で起こり、発病適温は 24～29℃。最高 34℃、最低 5℃である。
- ③春が比較的高温で降雨が続く、密植・多肥栽培で発病を助長する。

対策

- 栽植密度に気をつけ、厚まきを避ける。
- 排水対策をする。
- 登録農薬を使用基準に従って散布する。

